
恋々彷徨

タヒツチカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋々彷徨

【Nコード】

N5843Y

【作者名】

タヒツチカ

【あらすじ】

中学生のつばなとふみは親友だった。ふたりは中学校で初めての恋愛と失恋を知る。傷心のつばなを心配するふみだったが、ある日つばなが失踪する。

「恋々彷徨」

1 .

透明の教室に赤くとろけた夕日が紛れ込んで、橙色に混ざる。そのプリズムの中には肌色の私とつばなが座っている。ふたりの他に誰もいない美術室は静かで空気が澄んでいて放課後の時間を際限なく広げさせた。いろいろな色がねじ込まれた空間では私の存在がとても小さく感じられた。

ここで、つばなは油絵を描いていた。

美術の授業の課題の残りだった。授業時間のうちに完成できなかった生徒は放課後に美術室に残ってやらなくてはならない。わたしとつばなは授業中にいつもしゃべっていたので結局下書きもできずにいてしまった。

そこで放課後に残ってやっているのだけれど、やっぱり私たちはぺちやくちゃ話をしてしまい、こんな時間まで続いてしまっている。

「つばな、もう終わらせよう?」

「うーん、待って」

つばなは、そういつてまた筆をとった。つばなは絵がうまい。私としゃべらなかつたら美術の成績が5になるだろう。たぶん美術部のどの生徒よりも上手いはずだ。細かい技術はわからないけど、つばなの絵はとつてもきれいだ。鮮やかで、華やかだ。

私はすぐにぐちゃぐちゃと、「ピンとリング」という絵を描いておわりにした。油絵のにおいはツンときて、なんだか好きになれないのだ。だから早めに終わらせた。

一方つばなは黙りこくってひたすらに絵に向かっている。描いているのは私と同じ課題の「ピンとリング」。同じ題材のはずなのに、

なぜここまで差がつくのだろう。私は神様を少し恨む。でも絵が下手でもまったく困らないので私にとっては何となくでもよかった。そこで私はひたすらつばなを見ることにした。彼女は私の幼馴染で、大親友の女の子だ。ふたりは同じ病院で生まれ、同じ幼稚園に通い、小学校を卒業してこの藤沢中に進学した。そしてここまで、二人は一心同体だった。

でも高校に入ってから二人は別れた。

私は吹奏楽部に入ったけれど、つばなは帰宅部だった。

(……そしてしばらくしてつばなは先輩に出会ったんだよね)

顔を振って、思い直す。先輩の話はするべきじゃない。

つばなは、忘れなきゃならないんだ。

「ふみ」

「わっ」

気が付くと、つばなが私の後ろに立っていた。

ほつぺたに赤い絵の具がついている。手も緑やら紫やらの色で染まっでいて、まるで人間キャンバスみたいになっていた。

「終わったよ、絵」

「そか、おつかれ。帰ろっか」

「うん」

つばなはこくんとうなずくと小走りで絵具を洗いに行った。

私はやれやれ、と手を振って、つばなの完成させた油絵を見た。

タイトルは『割れた硝子』。

モデルは私と同じリングとビン、なのだけれど、絵の様子はだいぶ違っていた。

つばなの描いた絵ではビンがバラバラに割れて机の上に広がり、ところどころ林檎に突き刺さった絵だった。

それが血の吹き溜まりのようで、私にはこれが衝撃だった。

あまりにもショッキングだった。

そしてこの絵から連想されるのは、先輩のことだった。

あの事件。噂。口数の少なくなったつばな。

先輩。その存在。

「つばなっ」

「？なに、ふみ」

「この絵……」

わたしがつめよると、つばなは悲しそうに首を振った。

窓から美術室に入り込む夕日がつばなのシルエットだけを浮かび上がらせた。つばなの輪郭が滲んでいく。

彼女が消えてしまいそうで、思わず私は彼女を抱きしめた。

「な、なに、ふみ。恥ずかしいよ」

「……うん、ごめんね」

「……先輩のことだよ」

つばなは、小さく笑って、大丈夫だよ、といった。

ふみが思っているより私は大丈夫だよ、といった。

先輩がいなくても私は大丈夫だから。

ふみが心配しなくてもわたしは大丈夫だから。

だから、こんな些細なことで何も言わないで。

わたしはいまちょっとだけ落ち込んでいるだけなの。

だから、そつとちよつとだけ、一緒にいて。

わたしはふみが好きだから。

そういつて、つばなは私を抱きしめた。

夕暮れの中、油のにおいが満ちる教室で、影だけになった私たちは溶けて混ざり合って、同じ色になってしまっただけと抱きしめあっていた。

そして手をつないでから、コンビニなんかに寄り道をしながら、名残惜しいね、さみしいねって言いながら、わたしとつばなはつばなの家の前で別れた。

私はつばなのぬくもりが残る手をぎゅっとして、彼女に近づけたことを素直にうれしいと思ったのだった。

その後、家に帰ってお風呂に入りご飯を食べて、いざ寝るぞって布団に潜り込んだ後、暗闇の中で点滅している携帯を見ると、ヒ口

からのメールが四通着ていた。あまりメールをしたことはなかった
ので、素直にどんな用事だろう、と思った。

はじめの一通は放課後の時間帯に届いていた。ちょうどわたしとつ
ばなが美術室にいた頃の時間だ。

メールの本文には『校門で待ってる』と書かれていた。

私は首を捻った。

なんでまたこいつは私を待ってなんかいたのだろう。特に約束なん
てなかったはずだけれど。わけの分からないまま次のメールを開く。
二通目は、一通目から五分ほどして送られたメールだった。

『わり、さっきのやつぱナシ』

やはりと言っていていいかはわからないけれど、一行だけの素っ気無
いメールだった。でも困って頭をかくヒロの顔が伺える、そんな文
章のような気がした。

(こいつはなにがしたいんだ……)

普段からヒロはよく分からない男だ。ノリがいい時もあればひと
りでぼけーっと文庫本なんかを開いてみせたりする。私はヒロのこ
とを宇宙人かなにかだと割りとは本気で思っている。

中学生のタマじゃないんだ、きつと。

三通目にはちよつと長い文章が記されていた。時間は二通目の一
時間後ぐらいだった。

『さっきはわりい。気、悪くしてたらすまん。あのさ、明日昼休み、
屋上に出てきてくれない？ ちよつと話したいことがあるんだよね
ー』

私たちの学校は屋上に出ることができない。ヒロは一体どういう
つもりで私にメールを送ったんだろう。話って、なんだろう。

四通目を読むのはなんだかめんどくさくて、時間も時間だったの
でそのまま携帯を放置してベッドに潜り込んだ。

(中学生ってわかんないなー)

目を閉じるとさっきのつばなの絵が思い出された。ひび割れたガ
ラス瓶。まさにガラスハートだねって笑い飛ばしてあげればよかつ

たのかなあ。

でも笑い事じゃない、そう思うんだ。つばなにとって先輩がいなくなっただけということは、きっと私のお母さんやお父さんがそっくりそのまま死んでしまう、そういうことなのだろう。家に帰っても夕飯もお風呂もない、そんな生活。

少し想像するだけで涙がにじみ出てきた。

私はひとりが嫌いだ。

暗闇も、嫌いだ。

目を閉じて、しばらくすれば明日が来る。つばなと一緒に登校して、教室ではヒロが待っていて、私はひとりじゃなくなるんだ。

そっと、眠ることにした。体を丸めて、できるだけ小さくなって眠る。明日に思いを馳せると私は眠れる。安心して、眠れる。

「おやすみ……」

しかしこの次の日、私はひとりで学校に行くことになった。つばなが失踪したのだ。

2 .

気が付いたら学校とは逆方面の電車に乗っていた。

ネットの掲示板が何かで読んだお話しだ。

『いつもとは逆方向の電車に乗って、海まで行ってごらん。そこにはいつもと違う、素晴らしい時間が流れているよ』

なんとなく、頭の隅に残っていたのだろう。ふらっと、逆方面行きの電車に乗ってしまったのだ。

知らない駅名をアナウンスが告げる。窓から見える景色も見たことのないものだ。ぼーっとしながらも、どこことなく不安に思えてきてしまった。

今頃、学校ではどうしているのだろう。

通学バッグの中から時間割表を取り出す。……今が十時だから、ちよつとに時間目が始まったころだ。さっき自販機で買った紅茶を飲みながら、自分のいない教室に思いをはせる。

大騒ぎになっていないだろうか。

私は無断欠席なんてしたことはない。だからきつと家に電話が入ることだろう。お母さんは仕事で遅くまでいないからだれかが出て問題になることもない、もしかしたら今日いちちは自由に過ごせるかもしれない。

もしかして、と思う。

不安がちらりとこちらをのぞいてくるのだ。

だんだんと海に近づいていく電車とは関係ない教室。そこでは私のいない世界があるに違いない。もしかして、そこでは何の問題もなしに回ってやいないだろうか。

まるで『橘茅花』^{はな}という生徒なんて初めからこの教室にはいなかったかのように、世界ができてしまっただけではないだろうか。

それを思うと全身が震えるほどに恐ろしい。

でも、私は思う。

こんな世界、と。

先輩のいない私の世界なんて。

いない。

子供っぽいと自分でも思う。おもちゃが手に入らないから泣きわめく子供と同じだ。デパートの上のほうのフロアで床にねっころがって、やだやだと泣きわめく我儘で傲慢で無知な子供と同じだ。

それでも私はほしいものはほしいのだ。

逃げさせてください、と私は思った。願った。

すると私の中の私の中の神様が「いいだろう、逃げることを許可する」と偉そうに言ったのだ。そこで私の哀れな自意識は私の許可を得ず、私をこの電車に乗せたのだ。

私が、私を。

『えー次はー次はー』

ちらりと聞こえたアナウンスは目的地の駅名を告げていた。

電車でだいたい三十分。時計を確認して、私は車両から飛び降りた。

潮の香りが鼻にそよいだ。

駅のホームに降りたつた私は大きく深呼吸をして、自分の姿を見る。

「あ、制服」

普通に家を出たままの格好だったから、中学のブレザーそのままだった。さすがにこれはまずいと思う。平日の、真昼間に制服を着た子供がうろろしているのはやたらと目についてしまう。

そこで私は駅の改札を出てまっすぐにファストファッションのお店に行き、全身の服を揃えた。店員がいぶかしげな眼で私を見てきたけれど、特に咎められるといったことはなかった。

黄色のキャラ物のＴシャツと黒いひらりとしたスカート、それに灰色の何の変哲もないパーカーを買った。そしてすぐに公衆トイレでそれに着替えた。これで大いぶ無難な格好になったはずだ。

（お金が無くなっちゃったな……）

ここまで来た電車代が六百元、服を買った代金が四千元。財布には五千円ぐらいしか入ってなかったから、もう帰りの運賃すらなくなってしまう。

でも、もういいんだ。

そんな気持ちで私はここまで来たんだ。

潮の匂いのする駅で、海を眺めて、私は、私を埋める。

道路標識を見ると、浜辺までは一キロもないらしい。国道にそって歩けば着くと書いてある。

私はローファーをつっかけて、のろのろと歩道を歩き始めた。

冬を目前にして、どことなく町もさびしげな雰囲気をもっている。きつとこの町にとって私は異邦人なのだろう、余計にさびしさをぶつけられているような気がする。

道の両脇にはタピオカのお店だとか、おせんべいのお店だとか、おしゃれな建物が軒を連ねている。そこを抜けるように私は歩く。制服でばんばんになった通学かばんを引っ提げて歩く私の姿はきつとここには似つかわしくない。

あてなく彷徨。

標識が示す浜辺への距離が短くなっていくのにつれて、私の足取りも軽くなっていく。わずかに波がはじける音がする。私の心もざわめいていく。何となく、浜辺までいけば開けるような気がした。

だって、あの浜は、先輩と来たことがあるから。

(まだ、先輩がいる場所だから)

案外浜辺は近くて、十分と少しで着いてしまった。ざらりとした風が頬をなぜる。

浜辺は、とても寒かった。人もいない。波の音だけがする、やっぱりさびしい場所だった。

(先輩と来たときは賑やかだったのに)

それはそうだ。だって先輩と来たときは夏も夏、八月のアタマのことだった。海水浴だったり、サーファーだったりが集まっていた、まともに歩くことすらままならないほどだった。そんな中、先輩は私の手を引いてくれた。かき氷とフランクフルトをを買ってきて私に差し出してくれた。そして私の水着姿を見て、幼いとか魅力ないとか言わないで、「可愛い」って言うてくれたんだ。

とても、悲しくなる。

思い出せば思い出すほど、先輩は私の中に居座って大きくなって永遠に私の気持ちを抱きしめる。先輩の力は強くて、その両手で抱きしめられるとちょっと強すぎて苦しくなっちゃったりするんだけど、それが愛おしくて……。先輩はやっぱり私のすべてだったんだ。

ローファーと靴下を脱いでかばんに押し込んだ。すでにかばんはばんぱんだったけど、無理矢理に詰め込んだ。ファスナーを開けっ放しにしたままで砂浜にほおっておく。

私は裸足になって押し寄せる波に触れに行った。

砂の感触がひんやりと、ざらざらして気持ちいい。そこに波が静かに押し寄せる。私のくるぶしをちらつと濡らしたただけなのだけど、水が冷たすぎで震えてしまう。でも、なんだかこの感触が懐かしくてずつと足をつけていたくなる。

ざざん、ざざん。

波が寄せては離れていく。

まるで恋みたいだ、なんて乙女チックなことを考える。

ちょっと恥ずかしくて、一人でよかったな、なんて思う。もしも先輩か、ふみがいればきつと私を一日中からかうであろうってネタだ。

(ふみは、ヒロくんときあうのかな)

ふみは私の親友だ。生まれた病院から、幼稚園、小学校、そして中学校と全部一緒だ。唯一違うのは中学に入った部活だけ。

ふみはとつてもかわい。私なんてかなわないくらい。でもずつと男の子と付き合ったとか、仲がいいとかって話は聞かない。

私が先輩と付き合ったときだって、ふみは私の応援をするばかりで、反対に私がふみについて尋ねてもよくわかんないってごまかすばかりだった。

でもヒロくんとは最近やけに仲がいいみたいだ。おなじ吹奏楽部の男の子で、やたらとふみと気が合うみたいだ。よく二人で夫婦漫才みたいなことをしている。ちょっと騒がしいかもなんて思うけれど、どう見ても二人は似合いのカップルだった。付き合っていない、というのがウソみたい。

(私は今不幸せだけど、ふみには幸せになってほしいな)

(ふみが幸せなら、私も幸せだから)

波が、少し高くなってきたような気がする。さっきまではくるぶしまでだったのに、もうとつくに足首よりも高いところに波が来ている。潮が満ちているのだろう。

私は海の向こうを見る。この寄せてくる波はどこからくるのだろう。この水平線の向こうにあるだろうか。あのむこうには本当に私の知

らない国がるのだろうか。そこにはここに無いものがあるのだろうか。

おなかがかくう、と鳴った。でも食べ物を持っていない。時間も携帯を見なきゃわからない。それもかばんの中にある。波から上がってみるのも億劫だ。

(どうでもいいや、このまま……)

私はそっと目を閉じた。

目を閉じると、世界は私だけになる。聞こえる波の音と、冷たい空気の音。鼻にそよぐ潮の香り、冷たい波と、湿った砂にうずまわっていく足の裏の感覚。私にまつわるもの以外、すべてが無くなった世界がそこに広がる。

視界を無くすだけで私は一人になる。

でも、私の中には先輩がいるんだ。

ずっと寄り添って、私とともにいる。だから一人じゃない。先輩はいなくなっただけでなんかいない。

だから、大丈夫。だから、大丈夫。

このまま、こうしていたい。

波が高くなってくる。

潮が満ちてくる。

(気持ちいい……)

何時間も、何時間もこうして過ごした。

気づけば私は眠っていた。

先輩と、ふみとヒロくんとで遊園地にいる夢を見ていた。私はずっと楽しくて、ずっと笑っていた。ふみと一緒にジェットコースターに乗って、アイスを何段にも重ねて、観覧車に先輩と乗って……。

どうせ、夢だから、何を願ってもいいんだ。

津波で観覧車が流されて、見知らぬ島に流れ着いて、私たちは幸せに、社会と触れ合わず、四人だけで過ごしましたとき。

ただ私は溺れてしまうのだけだ。

口に塩水が入り込んであわてて目を覚ました。

夢は終わり。

私は仰向けで、砂浜に寝そべっていた。

波の満ちた浜辺で、水にまみれた服に包まれながら、夕暮れから夜になる狭間の時間、帳の下りる中グラデーシヨンの空の下で私は揺られていた。

水が冷たい、という感覚はもはや無くて、むしろ暖かいと感じていた。もう肌もマヒしちゃっているんだと思う。

(私、どうなるんだろう)

夜が近くなつて、帰らなきゃ、と思うのだけれど、もう帰りの切符代はないんだ。わたしはもうここで過ごすしかない。でも、どうでもいい。ここまま波の中、凍えて死んでしまえばいい。じゃぶじゃぶと浮かんで私はあきらめる。

先輩のいない世界なんていらぬ。

夢のような世界にいききたい。

さようなら、みなさん。

なんて、思う。

私が死んじゃったら誰が悲しむだろうか。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ふみ、あとは、あとはいない。もちろん始めの一週間ほどはクラスメイトも近所の人も悲しんでくれるだろうけれど、それ以上の関心は持ってくれないだろうな。しかもふみだってあと十年、二十年もすればきつと私のことを忘れてしまふだろう。だって私とふみはずっと一緒だったのは、生まれてからたったの十二年だもの。その二倍の年が過ぎればきつと私はふみの思い出の人になってしまう。私は、ふみの中で生きていたいのに。私は、死んだら何にも残らないんだなあ、と思った。

でも、生きても何も残らないんだろなあ、とも思うのだ。

(先輩は、どう思ったんだろう)

私は先輩の気持ちになって考えようと思ったけれど、どうにもうまくいかなかった。

(死ぬのって、どういう気持ちなのかな)

私は紺色にでらでらと輝く波の裾に、ゆっくりと足を踏み入れた。一度海から上がったからだろうか、冷たさがじんと体にしみる。

そのまま深いところまで歩いて行く。途中から急に深くなったので、泳ぎに切り替えることにする。

服を着たまま泳ぐのはやっぱりつらい。服に動きがとられて、うまく掻けない。

息継ぎの度に塩水が口に入る。しょっぱい。水炊きの鍋とか、そんな感じのしょっぱさ。つらい。真っ暗だ。藍色の水が怖い。

だいぶ沖の方まで行った気がする。距離の感覚が無い。ひたすらもがいて、ひたすら遠くに向かおうとしている。

砂浜の方を見やってみるも、もうそこには戻れそうにない。海岸沿いの道には車のライトがきらきらと光っている。

ぼんやりと浮かんでいる車のライトを見ながら、私は夜の暗がりのなかに何かが見える気がした。それはきっと先輩が直前にみたものだと思ったんだ。先輩と同じように死ねば私は。

「やだっ」

背中にぞわりと感覚が走る。それは恐怖だ。いよいよ、という恐怖。水面の揺らめきにあわせて私もゆらゆらと為す術もなく流されていく。もはや元には戻れない。

いまさら、怖い。

ふみっ。

「やだっ。死にたくない！」

終わりだ。死んじゃうんだ、私は。

短い十二年の人生はここで終わり。さよなら。

頬につたうのは涙なのか水なのか分からない。私はここで、ひとりで夜の海の中で、死んでしまうのだ。搜索されることもなくただただ海の藻屑となってしまう。

車のライトが、ぼんやりとした目に入ってくる。

赤い光だった。

(火事……?)

私は、そこで目を閉じた。

3 .

つばなが失踪した。

私がお話を聞いたのは、昼休みのことだった。四時限目の数学の授業が終わった時、校内放送で私の名前が呼ばれたのだった。

『高野史^{ふみ}さん、至急職員室に来てください』

大方、予想はついていた。

つばなは、居ないんだろ？と思っていた。理由は簡単で、朝につばなに会わなかったから。それだけである。

私たちはずっと一緒に、ずっと一緒に登校してきた。幼稚園も同じ通園バスに乗ったし、小学校の時も六年間欠かさず、一日も休むこと無く一緒に通い続けた。遅刻だってゼロだ。さらには二人とも風邪も引かなかったし、怪我すら無かった。

そして私は学校に携帯を持ってきてはいた。もちろんつばなにメールも送った。『大丈夫?』の一文だけだけど、その返事はなし。やっぱり、心配だった。

でも私は自分が無力で非力な中学生のひとりだということは知っていた。今私がつばなを探しに学校を飛び出しても、なんの助けにもならないし、そんなドラマみたいな展開が世の中に蔓延しているとは到底思えなかった。

だから私は大人しく数学の授業を聞いていたのだった。

そんな私にこの呼出しは願ったり叶ったりなのである。

「よし！」

私は急ぎ足で職員室へと向かった。

しかし、ちらり、と脳裏にかすめるものがある。

メール。

昨日ヒロから送られた、「屋上」のメールだ。

あれも確か昼休みの約束だったような、そんな気がした。そういえば、四通目を開いていなかった。階段を小走りで降りながら、スカートのポケットから携帯を取り出そうとする。

「いたっ」

「あ、スミマセン！」

と、誰かにぶつかってしまった。

「あ、ヒロ」

偶然か、はたまたなんだか。

そこにはヒロが立っていた。階段の踊場で、私は丁度ヒロに抱きつくようにしてぶつかっていたのだ。手のひらにヒロの体が触れている。私は慌ててその手を離れた。

空気に触れた手が熱い。

「なんでアンタがこんなところに立ってるの！」

「おまえがぶつかって来たくせに……」

ヒロは自分の胸をさすりながらぶつぶつと文句を言う。それは当然な言い分なだけけれど、私はすっきりとしない。

なんでこう、もやもやするんだろう。

「私は急いでの。ヒロの相手なんてしてる場合じゃないんです」

「知ってるよ、放送だろ」

「そ、職員室に行くんだから、どいて」

ヒロをぐいとおしやって、私はまた階段を下る。

（冷たいなあ、私）

私って、こんなにヒロに厳しい人間だったかな。いまいち、よくわからなくなってきた。きつとあのメールのせいなのだ。

屋上に呼び出す用事って、きつと……なんて思ってしまうから、私はおかしくなってしまうているのだ。それがたとえ私の妄想だとしても、悪くない推測だと思ってしまう。というかきつと十分にありえる展開だろう、それは。

（ヒロは、私のことが好き……！？）

口に出したら、それが現実として確定してしまいそうで。なんとなくそれはためらわれた。

そもそもつばなが大変なときに恋愛沙汰にうだうだ言うのは、なんだか悪い気がした。つばなをさしおいてそんな幸せな悩みを持つことは、親友に対する裏切りかのように思えるのだ。

階段を降りきったとき、頭上からヒロの声がした。

「ふみ！ 俺がメールで言ったことは、全部本当だから！」

そのあと、廊下を走っていく音がした。上靴でエナメルの床を撫でる、キュツキュとした音だった。よく分からないが、ヒロは言いたいことだけ言って走り去っていったようだった。

「？」

ひとり階段下に残された私はちんぷんかんぷんだった。

（メールで言ったこと？）

わずかばかり考えて、やっと思い出す。

ああ、そっか、四通目のメールか。

ちょうどそれを開こうと思っていたところだったのに、なぜか忘れてしまっていた。

私は再度携帯を取り出し、受信ボックスを開く。

そして四通目のメールを開く、も、『本文未受信』となっていた。きつと電波が悪くてうまく受信できていなかったのだろう。

もう一度サーバーにアクセスして、本文を受け取るうとする。

「……………」

超・長文のメールが受信された。

ぶつちやけ、読んでられないレベルだ。これは……………後で。

（今はつばなの方が千倍大事だもんね！）

私は目を通さないまま職員室に向かっていた。

そこでは、担任の先生と教務主任の先生が待っていた。二人とも神妙な顔でコーヒーをすすっていた。見るからに良い話ではなさそうだった。私はそのまま職員室の奥にある応接間に連れていかれた。なんでも職員室だと他の先生の目があるからだとか。

応接間はそれらしい作りになっていた。なにやら品のある壺が置いてあったり、掛け軸なんかあって和風っぽいくせに、革張りのソファーがフロアリングの床の上にあったりして、かなりちぐはぐな様相を呈していた。

私は担任の先生とはす向かいにソファーに腰掛け、差し出された紅茶を口に運んだ。ミルクも砂糖も入ってなくて、口の中に渋みが広がった。

教務主任の先生は扉の前に立っていた。携帯でだれかと電話をしているようだった。

「で、橘の話なんだが」

先生は私に気を使うかのようにそろそろと話を始めた。

でも私はさくつと現状が知りたかった。つばなが今どうしているかを知りたかった。

「つばなは、どうしたんですか」

「……どうやら、家は出たみたいだな。登校途中にそのまま別のところに行ったみたいなんだ。親御さんにも電話したんだが、心当たりはないそうだ」

つまり、まったくの行方不明だということだ。

「あの、警察とかは？」

「まだ一日も経ってないからなあ、まだ早計な気もするな。放課後になっても帰らなかつたら搜索を頼むと親御さんが言ってるんだよ」
つばなのお母さんにはあまり会ったことがない。それはいつも仕事をしてるからだ。つばなのお父さんはつばなが小さい頃に亡くなってしまったらしい。だからその分もつばなのお母さんは働かなくちゃいけないのだ。だからつばなと一緒に遊んでみると、「つばなのお守りはふみちゃんに任せちゃおうかな」なんて言われてしまった。そんな曖昧な思い出。

でも、その時からずっと、私はつばなのことを任されてしまったのだらう。

「高野、橘の行きそうな場所とか思い当たるところはないか？ ほ

ら、一緒に行つたゲーセンとかあるだろ？」

先生はなるだけフランクに私に語りかけてくる。

この状況は深刻じゃないんだ、そんな優しい大人のフィルターにかけられた科白を私にくれる。でも、それじゃダメだ。私にはちゃんと見えている。フィルターにかけられていない真実が。

つばなは、あぶない。

私だけが知っているコト。

それはつばなが先輩と付き合っていたこと。そして先輩は死んでしまったこと。先輩は、実はいい人間じゃなかったこと。つばなはそれを心のどこかで知っていた、ということ。でもつばなは先輩を本当に愛していたこと。そして今、とても傷ついているということ。これはただのブチ家出なんかじゃない。

つばなはきつと、先輩に会いに行つたのだ。

割れたガラス瓶を思い出す。

あれはつばなの心そのものだったのだろう。

「私、わかります。つばなのいるところ」

「おお、そうか。これから俺は橋を探そうと思うんだが、高野も来るか？ 授業を欠席にはしないから」

「あ、でもいると思う場所って二、三個じゃないんですけど……」

「大丈夫、いくらでも回るさ」

そう言うとき先生は手に持っていた缶コーヒーを一気に飲み干した。「いいですよ。川口先生？」

担任の先生は主任の先生にそう尋ねた。

行方不明の生徒を探すためにその友達の子供を授業をすっばかしてかりだしてもいいのだろうか。私にはその是非がわからなかった。曖昧だけれど、先生としてはおかしいけれど、人としては間違っていない……と思う、気がする。

「まあ……いいでしょう。くれぐれも気をつけてください」
渋谷主任の先生も承諾する。

これで晴れて私はつばなを探しにいけることとなった。

(思い当たる場所はたくさんある、まずはあの踏切だ)

私は担任の先生の車に乗り込んで、つばなと先輩の思い出の場所へと向かっていったのだった。

まずは、一番可能性のある場所である、踏切である。

ここは先輩が一人暮らしをしているアパートから歩いてすぐにある踏切だ。ここをわたらなきゃ駅から先輩の家までは行けない。だからつばなにとってここは先輩とつながる思い出の場所であるに違いないのだ。

私は一度だけ、つばなにつられて先輩のアパートの前まで一緒に行ったことがある。その時にこの踏切を渡ったことは鮮明に覚えている。

つばなは私の手を引きながら「ふみ、ここは私と先輩の踏切なんだよ」なんていう。それはどういう意味なの、と私は聞くのだけれど、つばなは笑って答えない。ただ一言、

「わたらなきゃ、会えないんだよ」

そんな、意味深なことをつぶやいてみせた。

つばなは、この頃から余り笑わなくなったような気がする。

……そして、この踏切は先輩が死んだ場所でもある。

私はそれをつばな本人からは聞いていない。

風のうわさ、なんとなく友達の中で流れている噂の中で私は先輩の死んだことを知った。

中学生を喰っている「先輩」という男の存在。そしてその死。

電車に轢かれたのは事故ではなく、ある恋人　それもやはり中学生なのだけど　による故意の殺人だったのではないか、という噂。

その真偽はわからない。殺人だとしたらその「恋人」は一体どうしているのか、だとかがきつとオチとしてついて回るはずなのに、どうもそのあたりは噂にならない。

きつと、事故なのだろう、と心のどこかで私は信じている。そうであって欲しいのだ。なぜなら、その「恋人」がつばなだとしたら

悲しすぎる。

「……ここにはいなそうだな」

先生がぐるっと周囲を見渡し、そう結論付けた。

きつと先生は先輩のことをなんにも知らないだろう。先輩は私たち中学生の間でも噂どまりの、いわば都市伝説的な存在なのだから。

(そういえば、私もつばなの話でしか先輩を知らないや)

結局、踏切につばなは居なかった。

次に向かったのは、踏切のすぐ近くにある先輩のアパートの前である。

都市伝説なんて言われているけど、先輩は本当に存在して、本当に死んでしまったのだろう。

アパートの様相は以前来たときとまるで違っていた。郵便受けには新聞紙や広告が詰まりすぎて溢れているし、扉の前にあるプランターの花は枯れ果てて消し炭みたいになってしまっている。

先生は、特に私に尋ねたりはしなかった。

ただ煙草をふかして、「橘がいたら呼んでくれ」と私に呟いただけだ。ヤル気がないのか、私に任せているのかわかりかねた。

しかし扉を開けるわけにも行かないので、周辺を回って見るぐらいしか出来ない。

……前来たとき、私はおじけづいてつばなを置いて逃げ帰ってしまった。私はそのとき既に先輩のおそろしさをわずかながらに感じ取っていたのだ。しかし、逃げ帰った。つばなを置き去りにしたのだ。

(そしてつばなも食べられた、のかな)

これはあまり考えないようにしていることである。何しろ、つばなは先輩を愛しているだから。

そう、今でも。

(死んだ人は強いよ)

つばなには最高の思い出があったのだろう。だから心から先輩に陶醉していた。素敵な日々だったのだ、つばなにとって先輩との日

々は……私との日常よりも。

思い出。

「あ、そうだ」

つばなのしていた自慢話。

先輩のアパートに行く、少し前の話だ。夏休み中、私はひたすら吹奏楽部の練習に明け暮れていた。だからつばなとはなかなか遊ぶ機会ができなくて、やっと遊んだのは夏休みの最終日のことだった。しかも名目は勉強会である。

そんな中、私はつばなの宿題を写しながらつばなの語る夏の思い出話を聞いていた。

「でね、ふみ。私先輩と海行っちゃったんだ」

「へー！ いいなー！」

「先輩、すつごく優しくてね、すつごく楽しかった！」

夏の日差しみたいなたつばなの笑顔に、私までほっこりとさせられてしまう。つばなは本当に嬉しそうに話をするのだ。

「水着だよね……恥ずかしくなかった？」

「ま、ね……でも、先輩、『かわいいよ』って言ってくれたんだ！。ありがと、ふみと選んだ水着だもんね、かわいいはずだよ！」

その「かわいい」は水着じゃなくてつばなへのものだと思っただけど……ま、いいかなんて思ってしまう。だってつばなが最高に嬉しそうなんだもの。

この時の私はあまり先輩を疑っていなかった。

つばながあまりに幸せそうだから、その幸せを壊してしまうようなことは絶対にしたくなかったんだ。

でも、この時の話を思い出すと、つばなにとって先輩との本当に嬉しかった思い出は、この時の海の話になる。

つまり……厳密に言つと、食べられる前、の話。

「海です」

「海？」

先生は首を捻った。

先生の車は似あわない青色のスポーツカーだった。いつもくたびれた授業をして、うだつの上からない公務員のような風体のくせに、こんなカツコつけた車に乗っているなんて、なんだか笑えてしまう。でもそんな車が向かう先が海だと話が違ってくる。

「高野は俺と海に行きたいの？」

先生はそんなことをいって茶化す。

「……先生もロリコンなんですか？」

「先生もってなんだよもって……」

とりあえず、一番近い海に行くことにした。

しかし、あたりはもうだいぶ暗くなってしまっていた。陽が沈むのがだいぶ早くなったような気がする。夜になればなるほど、つばなの安否が気になってくる。

運転をしている先生に声をかけることにする。

「先生、そろそろ警察にいったほうがいいんじゃない？」

「大丈夫、川口先生が手配してくれたはずだよ」

「その、先生、急いだほうがいいと思います」

「？　なんでだ？」

「つばなは、きっと死ぬつもりなんです」

結果として、警察はとつくに海に向かっていたらしい。

周りに学校もないのに制服姿の女子中学生が駅をうるついていたら、そりゃあいろんな人の目につくはずだ。そしてそこから色々な目撃情報を追っていくと、あっさりとその駅から一番近い海へと足取りがつかめたそうである。

でも通報が遅れたせいか、つばなが見つかったのはすでにつばなが海の中に身を投げた後だったそうだ。

私と先生が海岸についたときには、すでにつばなは病院に運ばれた後だった。

……つばなの体は冷え切って、すぐに動かせはしないようだけれど、命に別状はないとのことだった。

私はすぐに病院に向かい、つばなと対面した。

「つばなっ！ 大丈夫！」

「ふみ……」

つばなは病室のベッドに寝かされていた。その瞳はどこも見ていないような、焦点の合っていない海の底みたいに濁っていた。

「ばか、つばな」

そのまま、私はつばなを思い切り抱きしめた。昨日美術室でそうしたように、思いつきり両手につばなを感じたかったのだ。ただ、昨日よりもつばなの体は小さくなったように感じられた。

つばなは泣いていた。

先輩が死んだ時も、きつと泣かなかったであろうつばなが、今、泣いている。一体、なんの涙なんだろう。私も、なんでだか泣いていた。つばなに感情移入したわけじゃない。ただなんとなくこみ上げる色々なものが瞳からこぼれ落ちた、そんな感覚だった。

「ふみ、ね、分かったの、きつと、きつと先輩はもういない、でも私は生きなきゃいけない。先輩に甘えない、私はそんな世界をつくらなきゃいけないの！」

泣きわめきながら、つばなは叫んだ。

「ね、つばな、分かる？ そのセリフ、すっごくクサイ！」

私は泣いて、笑って、そういった。

「あはははは！」

こうして、つばなの半日の失踪劇は終了したのだった。

つばなは病院に泊まることになり、私は警察に事情を話しにいったあと、先生の車に送られて家まで帰った。

疲れきった私は夕ごはんを食べずに、シャワーを浴びてそのままベッドに潜り込んだ。そして恒例のメールチェックタイム。

……ヒロの、四通目のメール。長文のメール。

これを読んで私は驚愕した。

なんて、中学生って子供なんだろう！

笑いながら私は夢の世界へなだれ込んでいった。

中身はさっぱり覚えてはいないけれど、幸せな夢をみた気がした。

翌日、私は病院で目が覚めた。

見知らぬ白い天井が私を見下ろしていた。

（ああ、病院に泊まったんだっけ）

いまいち昨日のことが思い出せない。

海に一人でいって……それからどうしたんだっけ？

だんだんと、体に朝日が染みこんでいくように思い出してくる。

昨日のこと。ひとりでの放浪と、海でのこと、そして警察に保護されて、病院に運ばれたこと、そこにふみがやってきたこと、ふたりで大泣きして、大笑いしたこと。

「なんだか、恥ずかしい……」

自分の子供じみたところがあらわになってみんなに晒されてしまった。私のかっこ悪いわがままで、みんなに迷惑をかけてしまった。中学生になって、すこしは大人になったと思ったのに。

そのままベッドの上で自戒にふけていると、携帯が震えて、ふみからのメールが来たことを告げた。どうせ昨日のコトだろうと思っただけけど、ぜんぜん違う内容のメールだった。

『ね、つばな。これ、ヒロからのメール！ めっちゃ笑えるよ、見てごらん』

その下にはヒロくんからふみに宛てたと思われる文が記されていた。かなりの長文だけど、中身がからつきし無いのですぐに読めた。『ふみへ。まず、謝ろうと思う。吹部（吹奏楽部のことだ）に入っただけとおまえといういろいろやってきたけど、俺はお前にいたずらばかりをしたよな、本当に済まない。でもな、それはお前が嫌いだからじゃないんだ。俺は、本当なふみのことが好きだったのかもしれない。でもな、聞いてくれ、俺はふみが好きだったんだ。それは間違いない。でも、俺、昨日、クラスの小鳥遊さんに告られたんだよ

ね。でさ、俺、オツケーしたんだ。だからけじめをつけようと思っ
てふみに話そうと思ったんだ。で、校門で話そうと思ったけど、や
っぱりビビって延期にして、屋上で話そうと思っただけど、やっぱ恥
ずいからメールで話すことにしたんだわ。俺は、おまえが好きだっ
た！ ありがとな、うん、じゃ、学校で』

それでメールは締めくくられていた。

「……………なにこれ」

ドン引き、というか意味不明だった。実に頭の悪い文章だった。

「これって、告白……………じゃないし、なんなんだろう」

頭を抱えた私は、朝早いけどふみに電話することにした。

なんとワンコール目でふみは電話に出た。まるで私からの電話を
待ち構えているようだった。

「あ、つばなー？ メール見た？」

ふみは異様に明るい声で話し始めた。

「見たけど、なにあれ？」

「意味わかんなかったけど、ま、はじめなんでしょ？」

「私には自慢にしか見えなかったけど……………」

「確かに、ね。そだ、つばな、退院は何時ぐらい？」

ふみにとつてこのメールはたいした意味を持っていないのだろう
か。すくなくとも私にはふみとヒロくんはお似合いのカップルのよ
うに思えたからだ。きつとふみだつてヒロくんのことを憎からず思
っていたはずなのに……………。

「退院はお昼ちよつと前になるつてさ」

「あ、ほんと？ じゃあ三時ぐらいに昨日の海に行こうよ」

「え？ ふみ、何言ってるの？」

「いいじゃん、ちよつと私にもわがままさせてよ」

「え、あ、うん……………」

それを言われると頭が痛い……………。昨日さんざんふみにも迷惑をか
けたから、それを持ち出されると断るに断れない……………。

「じゃ、病院に迎えに行くから！」

そして電話は切れたのである。

やけにテンション高いなあ……。なんであんなに元気なんだろう。不思議に思いながらも、私はゆっくりと二度寝をするためにまたベッドに潜り込んだのであった。

(入院って初めてだけど学校をサボるのって楽しいな)

なんて、すこし私も浮かれてしまっている。

そこで、ひとつ疑問が湧いてくる。

「あれ、ふみは学校に行かないの……?」

それから暫くして、退院することになった。警察の人が説教をしにやってきたりしたけど、未成年ということ、まあ注意ぐらいですんだわけだ。お母さんは夜にあわててやってきたけど、朝方には仕事に行ってしまった。まったく慌ただしい人だ。

そして、病院の自動ドアを開けた先、外のロータリーの前にはふみが待っていた。しかも私服姿だ。

「ふみ、学校は?」

「早退したの」

「今、三限目だよ……」

すると、得意げにふみはにやりと笑ってみせた。

「私には強力な味方がいるからね。さ、行こう!」

ふみは私の手をとって、駅に向かって歩き始めた。その足取りはとつても軽くて、心強く感じられた。

そこから海までの道のりはすぐだった。昨日ひとりで何時間もかかったような気がしたのが嘘みたいだ。

昨日と変わらない砂浜を眺めて、私はため息を付いた。

(ここに飛び込んで、私は死のうとしたんだよね……)

自分でもどうかしていたと思う。

死ぬなんて。そんな、まだ私は若いのに。

先輩がいけないのは悲しいけれど、私はそれでも生きていかなきゃ

いけないのに。

「つばなはさ、悪魔がいると思う?」

ふみが唐突に口を開いた。

「悪魔……?」

「人間の耳元で悪いことをささやいて、人に悪いことをさせる、そういう悪魔」

ふみの横顔は、いつもと変わらないように見えた。だけど、どこか強がっているような、むりにその顔を作っているような風にも見える。

「つばなは悪魔に囁かれたんだと思う。だからさ、昨日のことは忘れようか!」

だったら、こういうところに連れてきて欲しくはないんだけどな。トラウマとかがあったら今頃私は発狂していると思う……。

「悪魔ね……。ふみは、悪魔に囁かれないの?」

「されたよ、悪魔に」

不意に、ふみの顔がふつと真面目になったような気がした。それはきつと女の子の眼なのだ。

(やっぱり、ヒロくんのことだよね……)

あの、ヒロくんのメールは、なんとというか、自慢であり、自虐あり、自意識過剰で、到底許せるものじゃない、というか、それをふみに読ませてどうして欲しいのかがさっぱりわからない、そんな代物なのだ。アホで、間抜けで、重要なことが抜けていて、そして鋭いナイフみたいで冷たさをもってふみを切りつけた、そんなメールなのだ。

「ほんのね、小粋な常套句なんだよ」

「……ふみ?」

果てしなく広がる水平線を眺めながら、風に長い髪を揺らしながら、ふみはぽつりぽつりと言葉を漏らしていった。

私はその破片を集めながら、パズルを組み立てるようにふみの心のなかを読み取っていった。

「ほら、つばなも叫びなよ」

ふみは私の背中を叩く。

なんだか、笑えてきた。何もかもが、笑えてしまう。

海の果てと、空の向こうが合わさって、そこが世界の隅っこだと
して、私はそんな箱庭で生きているんだ。そこには限られた人間し
かいないくて、先輩はそんな中のひとりで、先輩は死んでしまっ
て。

「先輩のばかやろー」

「……………」

私の声は、空の向こうに吸い込まれていった。

すーっと、消えていく。

体の奥にうずまっていたコールトールのような感情が、薄まって
行くのを感じる。

「……ふみ、きつと私たち、今日のことを忘れちゃうよ」

「……つばな」

「あと十年も、二十年もたって私達が大人になったらさ、今日のこ
とも先輩のこともヒロくんのことも全部忘れちゃうよ。」

静かな海を眺めながら、ぽつりぽつりと言葉が砂浜に落ちていく。

ふみは私の言葉を、頷きながら聞いてくれた。

「それでもさ、つばな。私たちはずっと一緒にいられたらいいよね」

ふみは私の手を取った。

温かい手の温度が私に流れ込んでくる。

ずっと一緒にいるなんて、絶対に無理だ。そんなに都合のいい話
なんて私達に用意されているわけがない。でも、ふみがそういうな
らそういうこともあるかも、なんて思った。

いつか大人になって、私とふみは友達だったら、どんなにか幸せ
だろう。

まだ未来はわからない。私たちはいくらでも変わってしまうだろ
う。また恋をするかもしれないし、また失敗するかもしれない。

……後悔はしない。

したら、前の自分を裏切ることになるから。

今から見たら馬鹿な事かもしれないけれど、そのときの自分は本気で生きていたんだ。だから、私は後悔はしない。

「ね、ふみ。もう帰ろう」

「そだね。帰ろっか。またお巡りさんに迷惑かけないようにさ！」
私たちは手をつないで帰った。

夕焼けに染まりつつある水面を背にして海岸を後にした。二人は手をつないで真っ直ぐに家に帰る。また明日、学校で。そう言って別れた。

また明日朝が来て、夕焼けがやってくる。

そのサイクルの中、私はまだどこかに行ってもいいかな、なんて思う。あて無く、旅をしなきゃいけない。

あなたの泣かない。あなたの笑わない。あなたの怒らない。

あなたのはしゃがない。あなたを憎まない。あなたの匂いのない。

あなたの手をつながない。

そんな世界を。

あてなく彷徨。

あてなく探す。

でも、そんなのないし。

だから、そういう世界を、作らなきゃならない。

生きてくためにさ。

そういうふうに住きたら、今まで見ていた景色が、小さくなって泣くかも。

でも、また。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5843y/>

恋々彷徨

2011年11月17日00時13分発行